

宮 西 • 一 角 遺 跡

(平成11・12年度)

市道林町47号線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第2冊

2001年9月

高松市教育委員会

例　　言

- 1 本報告書は、市道林町47号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第2冊で、高松市林町に所在する宮西・一角遺跡の調査報告を収録した。
- 2 発掘調査および整理作業については、高松市教育委員会が実施し、文化部文化振興課文化財専門員川畠聰・讃岐文化遺産研究会中西克也が担当した。
- 3 本報告書の執筆は中西が行い、編集は川畠・中西が行った。
- 4 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 5 発掘調査および整理作業・本報告書刊行にあたって、多数の関係諸機関ならびに方々から貴重なご教示・ご指導をいただいた。
- 6 本報告書の高度値は海拔高を表し、方位は第1図が座標北を、その他は磁北を表す。
- 7 本報告書で用いる遺構の略号は次のとおりである。

S A ……柱列 S D ……溝 S K ……土坑 S P ……柱穴
S X ……性格不明遺構

- 8 本文の挿図として、高松市都市計画図2千5百の1「42 太田」「43 林」を一部改変して使用した。
- 9 遺構番号は1～4次調査に続く番号とした。ただし、柱穴は調査時の番号を使用した。
- 10 本文中のNoは調査地東側を南北に走る市道西境界を起点とする工事用に20m間隔で設定された基準である。

目　　次

第1章 調査の経緯と経過	2
第1節 調査の経緯	2
第2節 調査の経過	2
第2章 調査の概要	3
第1節 調査区の設定	3
第2節 弥生時代の遺構・遺物	6
1 土坑	6
2 溝	8
3 性格不明遺構	8
第3節 室町時代の遺構・遺物	8
1 溝	8
2 柱穴	10
第4節 江戸時代の遺構・遺物	11
1 土坑	11
2 溝	11
3 柱列	12
4 性格不明遺構	12
第3章 調査のまとめ	12

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

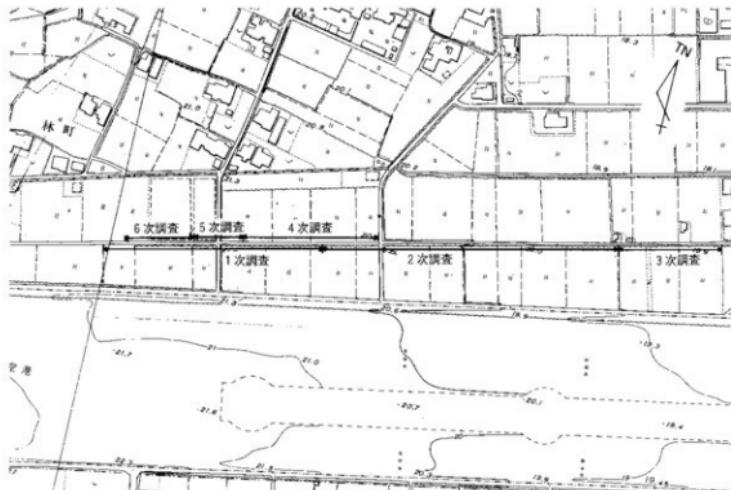
本書に報告する宮西・一角遺跡は、市道林町47号線道路拡幅工事に伴い調査したものである。当遺跡の南側に位置する林町76番地14において社会福祉法人すみれ福祉会が、特別養護老人ホーム（さくら荘）の建設を計画し、時期を同じくして市道林町47号線の工事が実施されることが判明した。

文化振興課では、さくら荘建設予定地の発掘調査、弘福寺領山田郡田園南地区の発掘調査も近接地で予定されていること、空港跡地遺跡の状況から道路拡幅工事予定地にも遺跡が広がっていることが十分予想できることから、道路課と協議を行い工事実施前に発掘調査を行うことで合意した。発掘調査の実施にあたっては現有道路が生活道として利用されていることから道路の両側の削溝と擁壁工事で地下遺構に影響のある範囲（幅約2m）について調査を実施した。平成6～8・10年度に1～4次調査を実施し、すでに報告したとおりである。

第2節 調査の経過

5次調査は平成12年2月17~23日に実施した。調査面積は63m²である。17・18日は表土の機械掘削を行い、21日までに遺構検出を終了し、確認した溝・土坑・柱穴の掘り下げを始め、22日で全ての遺構の調査を終了した。23日に完掘状況の写真撮影を行った。

6次調査は平成12年5月10~16日に実施した。調査面積は170m²である。11日までに表土の機械掘削を終え、遺構検出作業を開始し、溝・土坑・柱穴等を確認した。中世から近世の遺構の調査を実施した。調査区東部部分について地山まで掘り下げ、弥生時代の土坑を確認し、15日までにその調査を終了した。16日に完掘状況の写真撮影を行った。

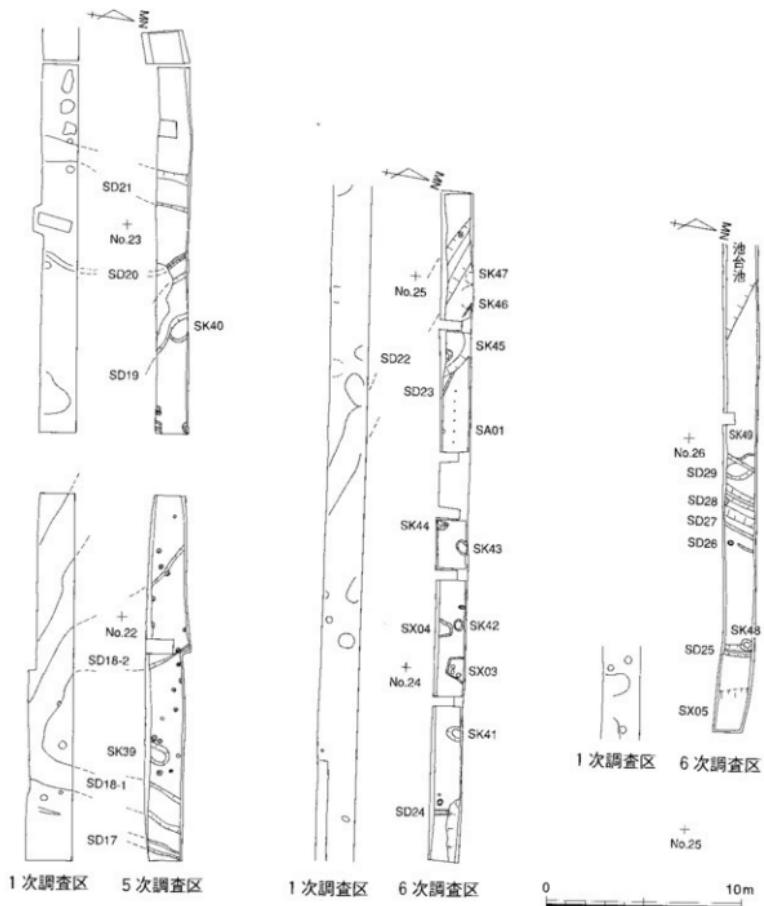


第1図 宮西・一角遺跡調査区位置図(S:1/4,000)

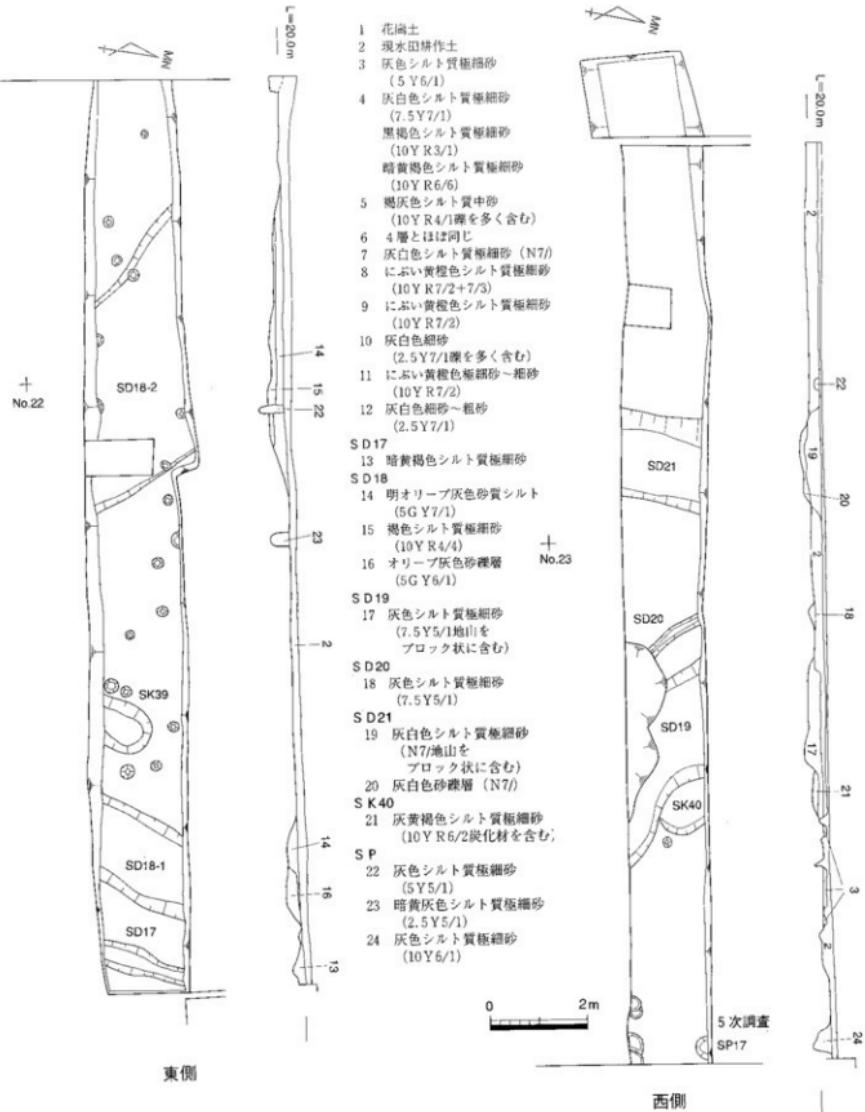
第2章 調査の概要

第1節 調査区の設定

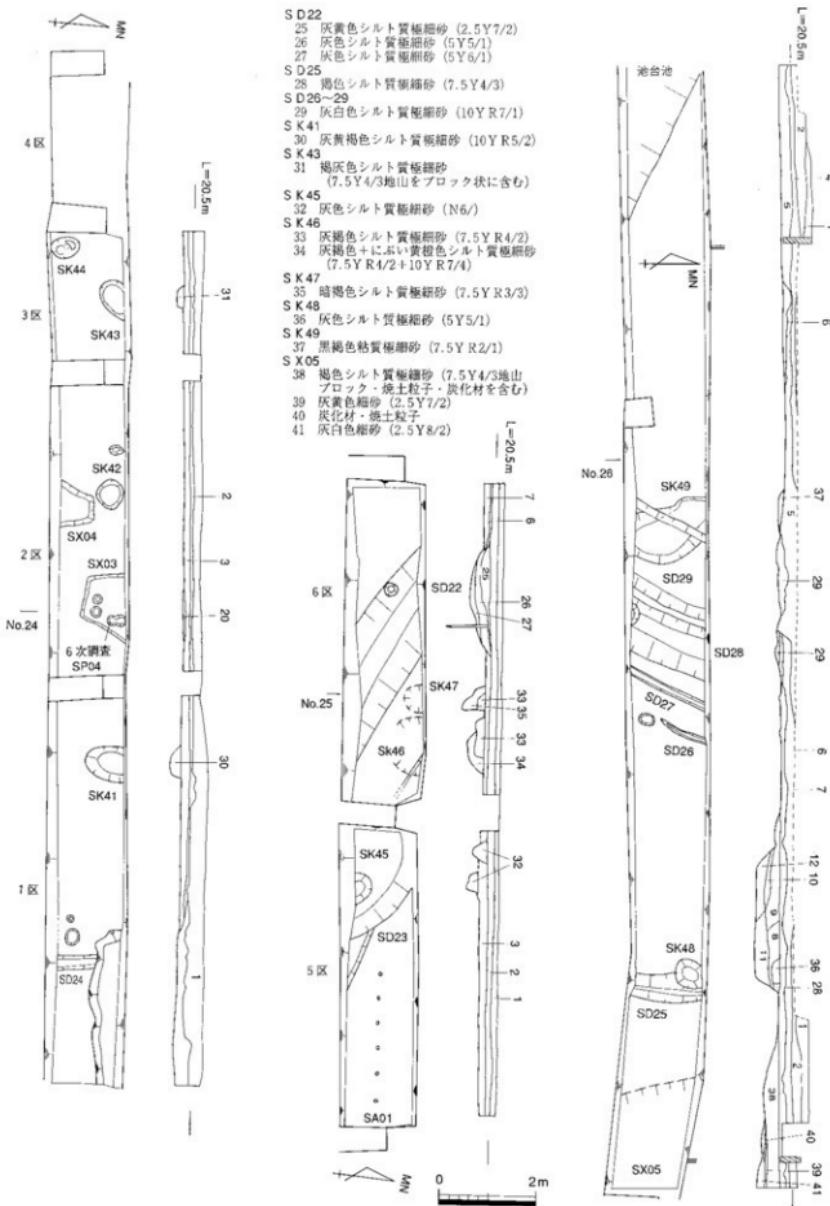
5次調査は4次調査区と西接する位置にあたり、道路を挟んで東西に分けられる。東側の調査区の全長は10.80m、西側は20.70mである。6次調査は5次調査区と西接する。調査区はコンクリート水路によって分割され、東から1～7区と仮称する。1区は8.00m、2区6.00m、3区2.50m、4区2.50m、5区6.20m、6区6.60m、7区38.20mである。



第2図 宮西・一角遺跡遺構配置図(1・5・6次調査, S:1/250)



第3図 5次調査区遺構配置図(S:1/100)



第4図 6次調査区構造配置図(S:1/100)

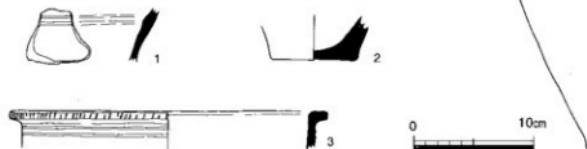
第2節 弥生時代の遺構・遺物

1 土坑

S K40 (第5・6図)

No23から東へ5.5mの位置に検出された土坑であり、16世紀頃の溝であるS D19に切られる。遺構の北部が調査区外に広がることと西側がS D19に切られるため、土坑の平面形・規模は不明である。確認面のレベルは標高19.95mである。検出できた部分の平面形は不整な円形を呈する。東西方向の残存長は0.96m、南北長は1.00mを測り、検出面からの深さは0.20mである。底面は平坦である。埋土は灰黄褐色シルト質極細砂の單一層である。

出土遺物は弥生土器壺(1)、同甕(2~4)である。
1は口縁部下位であり、内面に貼付突帯を巡らす。2は底部片である。3・4は逆L字状口縁甕であり、3の口縁端部に刻目を施し、胴部外面に範描沈線紋を2条残存する。4は胴部外面に11条の範描沈線紋を巡らしており、内外面は摩滅のため調整は不明である。

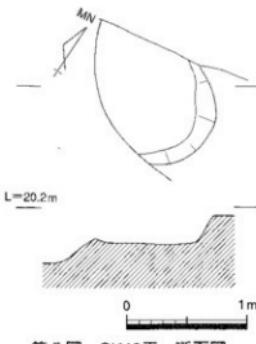


第6図 SK40出土遺物実測図 (S:1/4)

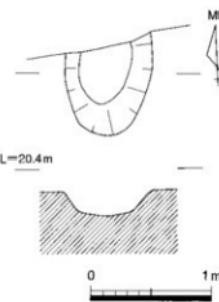
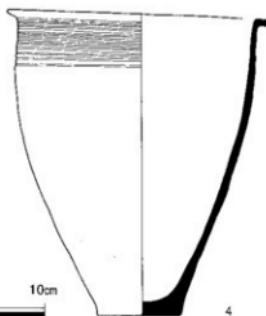
S K41 (第7・8図)

No24から東へ3.25mの位置に検出された土坑である。土坑の北半部が調査区外に広がっている。確認面のレベルは標高20.22mである。検出できた土坑の平面形は南北に長軸を有する楕円形を呈する。規模は東西の短軸が0.73mを測り、南北の残存長が0.75mである。深さは0.21mを測り、底面中央がやや低くなっている。埋土は灰黄褐色シルト質極細砂の單一層である。

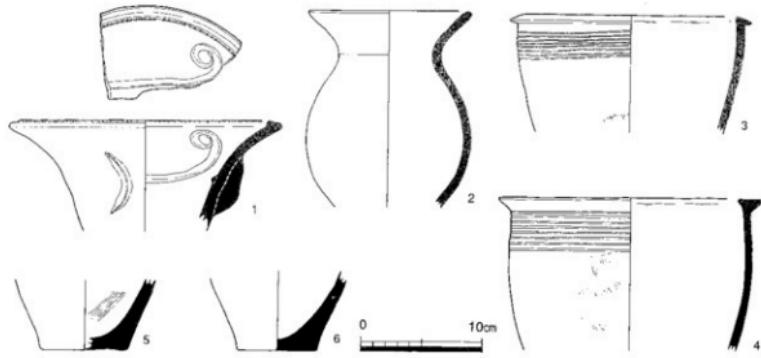
出土遺物は弥生土器壺(1・2)、同甕(3~6)である。1は頸部外面に耳状の粘土を貼り付けており、内面に蕨手状の突帯を付加する。口縁端部内面は突帯を貼付け、刻目が施される。2は小形の壺であり、球形の胴部と大きく外反する口縁部をもったプロボーションである。3・4は逆L字状口縁甕であり、胴部外面に範描沈線紋が8条施される。5・6は甕底部である。



第5図 SK40平・断面図
(S:1/40)



第7図 SK41平・断面図
(S:1/40)



第8図 SK41出土遺物実測図 (S:1/4)

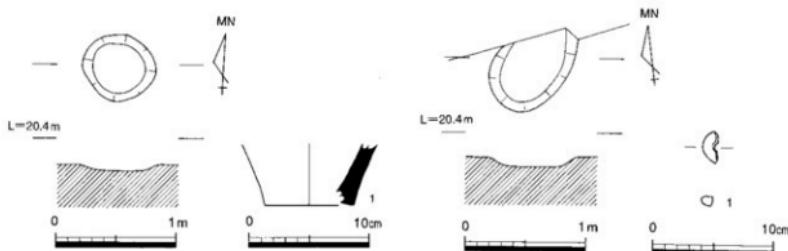
S K42 (第9・10図)

No24から西へ2.10mの位置に検出された土坑である。確認面のレベルは標高20.18mである。土坑の平面形は円形を呈し、規模は東西軸0.60m、南北軸0.55mを測る。確認面からの深さは2cmである。底面は平坦である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物は弥生土器甕 (1)、その他の弥生土器片である。

S K43 (第11・12図)

No24から西へ6.25mの位置に検出された土坑であり、北半部は調査区外に広がっている。確認面のレベルは標高20.20mである。土坑の平面形は南北に長い稍円形を呈し、規模は東西軸0.60m、南北軸0.70mを測る。確認面からの深さは0.15mである。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。出土遺物は弥生土器ミニチュア (1)、その他の弥生土器片である。



第9図 SK42平・断面図
(S:1/40)

第10図 SK42出土遺物
実測図 (S:1/4)

第11図 SK43平・断面図
(S:1/40)

第12図 SK43出土遺物
実測図 (S:1/4)

S K44

No24から西へ7.50mの位置に検出された土坑である。確認面のレベルは標高20.20mである。土坑の平面形は円形を呈し、直径は0.40×0.60mを測る。深さは0.23mで、北側に段を有する。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

S K46

No25から東へ1.00mの位置で土層断面のみに検出された土坑であり、直径は1.16m、深さは0.33mを測る。確認面のレベルは標高20.40mである。埋土は2層である。

S K47

No25の位置で土層断面のみに検出された土坑であり、直径は0.50m、深さは0.48mを測る。確認面のレベルは標高20.40mである。埋土は2層である。

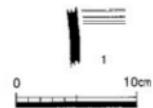
S K49

No26から西へ1.50mの位置で検出された土坑であり、SD29に切られる。確認面のレベルは標高20.35mである。平面形は不整な橢円形を呈し、東西の短軸は1.10m、深さは0.10mを測る。埋土は黒褐色シルト質極細砂の単一層である。

2 溝

S D23 (第13図)

No25から東へ3.50mにある溝である。溝の大部分はSK45に切られるため、規模・平面形は不明である。深さは8cmを測る。埋土は褐灰色シルト質極細砂である。出土遺物は弥生土器壺(1)である。



第13図 SD23出土遺物
実測図 (S:1/4)

S D25

No25から西へ9.10mの位置に検出された溝であり、北端をSK48に切られる。溝は南北方向に延び、幅は0.60m、深さは0.13mを測る。埋土は褐灰色シルト質極細砂である。

3 性格不明遺構

S X05

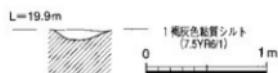
No25から西へ6.00mの位置に検出された落ち込みであるが、土層断面のみの検出であり、明確な平面形は確認できなかった。確認面のレベルは標高20.36mである。深さは0.30mを測る。東側の調査区にはこの落ち込みが検出されていないことから、SX05の直径は3.00m未満であると考えられる。埋土は3層に分層され、地山ブロックを含む褐色シルト質極細砂が主体を占め、底面直上に灰黄色細砂・炭化材が薄く堆積する。埋土中から弥生土器の小片が出土した。遺構の詳細は不明であるが、その性格としては焼土・炭化材の検出から堅穴住居跡の可能性が考えられる。

第3節 室町時代の遺構・遺物

1 溝

S D17 (第14図)

No22から東へ12.00mの位置において検出された溝であり、SD18-1と同方向に延びる。確認面のレベルは標高19.86mである。溝の幅は0.60m、深さ0.15mを測る。



第14図 SD17断面図 (S:1/4)

S D18 (第15・16図)

No22から東へ9.50mとNo22の位置に検出された溝であり、東側の溝をS D18-1、西側の溝をS D18-2と呼称する。確認面のレベルは標高19.80m前後である。S D18-1は幅1.70m、深さ0.30mを測り、S D18-2は幅3.55m、深さ0.20~0.40mを測る。埋土は明オリーブ灰色砂質シルト・褐色シルト質極細砂・オリーブ灰色砂礫層である。S D18-2の主軸方位は1次調査のS D18-2と比較すると北方向に角度を変えている。溝に区画された内側には多数の柱穴があり、その中には直線的に配置されたと思われる柱穴があるが、調査面積が非常に狭いため、報告書では建物跡の可能性が考えられるということだけにとどめる。



第15図 SD18断面図 (S:1/80)



第16図 SD18出土遺物実測図 (S:1/4)

S D19 (第17図)

No23から東へ4.50mの位置において検出された溝である。溝の南側は搅乱を受け、北端では弥生時代のSK40を切っている。確認面のレベルは標高20.00mである。溝の幅は2.10m、深さは0.20mを測る。埋土は灰色シルト質極細砂の単一層である。この溝の西側には柱穴が確認されなかったことより、S D19は屋敷地を区画する溝であると考えられる。

S D26

No26から東へ5.50mの位置において検出された溝であり、S D27~29と同一方向に延びている。確認面のレベルは標高20.29mである。溝の南端は後世の搅乱のため消滅する。溝の幅は0.13m、深さは2cmを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

S D27

No26から東へ5.00mの位置において検出された溝である。確認面のレベルは標高20.29mである。溝の幅は0.13m、深さは2cmを測り、ほぼ直線的に延びる。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

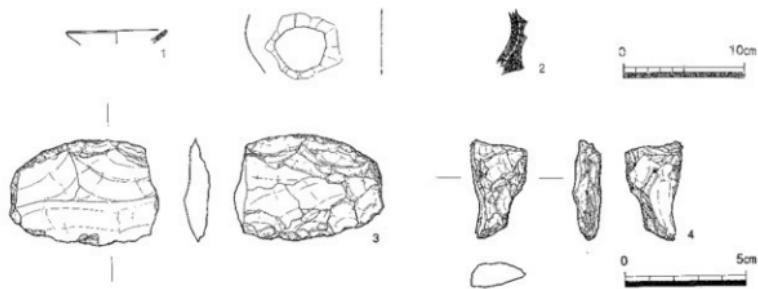
S D28 (第18図)

No26から東へ3.50mの位置において検出された溝である。確認面のレベルは標高20.30mである。溝の幅は1.00m、深さは0.13mを測り、規模の大きな溝である。溝はほぼ直線的に延びる。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物は、土師質土器小皿(1)、同釜(2)、石庖丁(3)、刃器(4)、その他の土器片である。1は内外面とも摩滅のため調整は不明である。2は釜胴部下半で、脚部との接合部分である。外面の調整は箝削り、胴部内面はナデが施される。3・4はサヌカイト製である。



第17図 SD19出土遺物実測図 (S:1/4)

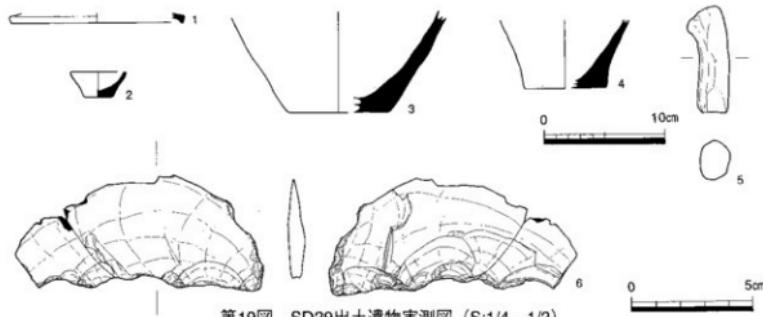


第18図 SD28出土遺物実測図 (S:1/4, 1/2)

S D29 (第19図)

No26から東へ2.00mの位置において検出された溝であり、SK49を切っている。確認面のレベルは標高20.34mである。溝の幅は1.70m、深さは0.12mを測り、規模の大きな溝である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物は、須恵器蓋（1）、土師器ミニチュア土器（2）、同壺（3）、同甕（4）、土師質土器釜（5）、刃器（6）である。1は器高の低い蓋で、内外面とも回転ナデが施される。



第19図 SD29出土遺物実測図 (S:1/4, 1/2)

2 柱穴

5次調査 S P17 (第20図)

No23から東へ10.50mの位置において検出された柱穴である。確認面のレベルは標高20.00mである。柱穴の直径は0.46m、深さは0.36mを測る。埋土は灰色シルト質極細砂の単一層である。出土遺物は土師質土器杯（1）である。



6次調査 S P04 (第20図)

No24から0.30m東にある柱穴である。確認面のレベルは標高20.26mである。柱穴の直径は20m、深さ0.22mを測る。出土遺物は須恵質土器杯（2）である。



第20図 5次調査SP17・6次調査SP04出土遺物実測図 (S:1/4)

第4節 江戸時代の遺構・遺物

1 土坑

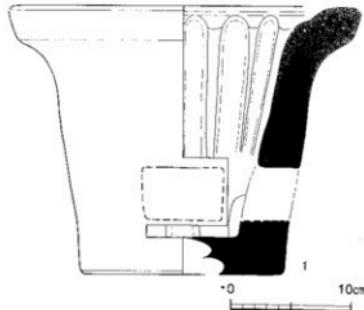
S K 39

No22から7.00m東にある土坑であり、確認面のレベルは標高19.75mである。平面形は梢円形を呈し、東西の短軸は1.00m、深さは10cmを測る。埋土は褐色シルト質極細砂である。

S K 45 (第21図)

No25から3.50m東にある土坑で、確認面のレベルは標高20.34mである。土坑の大部分は調査区外に広がるため、その平面形・規模は不明である。深さは0.54mを測る。

出土遺物は七輪（1）、陶磁器片である。



第21図 SK45出土遺物実測図 (S:1/4)

S K 48 (第22図)

No25から西へ9.50mにおいて検出された土坑であり、SD24を切っている。確認面のレベルは標高20.26mである。平面形は円形を呈し、直径は0.60m、深さは0.16mを測る。

2 溝

S D 20

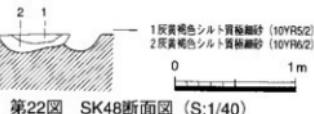
No23から2.00m東の溝である。確認面の標高は19.98mである。溝の幅は0.25m、深さは9cmを測る。埋土は灰色シルト質極細砂の単一層である。

S D 21

No23から1.50m西において検出された溝である。確認面は標高20.00mである。確認面での溝の幅は2.35m、深さは0.44mを測る。

S D 24 (第23図)

No24から東へ7.50mの位置において検出された溝であり、北端は擾乱を受けている。確認面のレベルは標高20.33mである。溝の幅は0.30m、深さは7cmである。



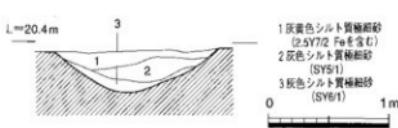
第22図 SD24断面図 (S:1/40)



第23図 SD24断面図 (S:1/40)

S D 22 (第24図)

No25の位置に検出された溝である。確認面のレベルは標高20.42mである。溝の幅は1.40m、深さは0.34mを測る。埋土は3層に分層される。溝の北端に現存長0.86mで先端部を加工された杭が2本打ち込まれている。



第24図 SD22断面図 (S:1/40)

3 柱列

S A01

No25から東へ6.00mの位置に検出された柱列である。確認面は標高20.34mである。直径4cmを測る6個のピットが規則的に0.50m間隔で直線的に並んでいる。ピットの深さは0.10mであり、埋土は灰白色シルト質極細砂である。この柱列はいわゆる「樅架」であると考えられる。

4 性格不明遺構

S X03

No24の位置の落ち込みである。確認面のレベルは標高20.30mである。平面形は不整な長方形を呈し、南辺の長さは0.80m、深さは4cmである。埋土は灰色シルト質極細砂である。

S X04 (第25図)

No24から2.00m西の落ち込みである。確認面は標高20.33mである。平面形は不整な長方形を呈し、北辺は0.50m、深さは3cmで、埋土は灰色シルト質極細砂である。サヌカイト製の石錐（1）が出土した。



第25図 SX04出土遺物
実測図 (S:1/2)

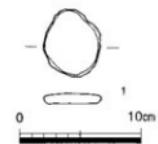
第3章 調査のまとめ

5次・6次調査では調査区全域に多数の遺構が検出された。その遺構の時期としては、弥生時代・室町時代・江戸時代に分けられる。

弥生時代の遺構はSK40~44・46・47・49、SD23・25、SX05であり、調査区全域に分布する。特に注目すべき遺構はSK40・41とSX05である。SK40・41は出土土器から前期末～中期初頭に比定される。壺は広口壺のみであり、無装飾のもの（第8図-2）と口縁部内面に貼付突帯で加飾するもの（第6図-1・第8図-1）がある。第8図-1は内面の突帯と外側の耳状の貼り付けの特徴から伊予東部地域の「阿方式土器」に類似する。壺は逆L字状口縁であり、範描沈線紋が施される。1次～4次調査でも同時期の土坑が多数検出されているが、その性格は不明である。SX05は第2章で前述したように焼土と炭化材の存在から竪穴住居跡である可能性が考えられ、出土した土器は第26図に示したもので弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

室町時代の遺構はSD17~19・26~29、柱穴であり、調査区の東側と西側に分布する。SD17~19は1～4次調査報告書で考察されているように屋敷地を区画する溝であり、これらの溝に開まれた範囲に柱穴が集中している。建物跡の存在の判断は、調査面積が狭いため現時点では保留とする。これらの溝はおむね条里地割と合致する。

江戸時代の遺構は、SK39・45・48、SD20~22・24、SA01、SX03・04と池台池堤防跡である。溝は条里方向に延びており、幅・深さともに大きな溝である。池台池堤防跡は断面観察であるがSD22西側から約19.8mの範囲で盛土層（第3図の6層）が確認された。盛土は灰白色シルト質極細砂・黒褐色シルト質極細砂・暗黄褐色シルト質極細砂をブロック状に含み、この西側は池台池となる。



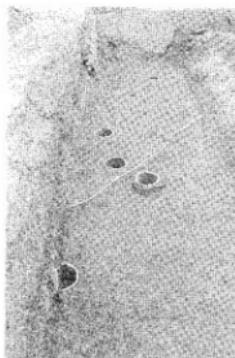
第26図 SX05出土遺物
実測図 (S:1/4)



5次調査
東側完掘状況



6次調査 1区完掘状況



5次調査
東側完掘状況



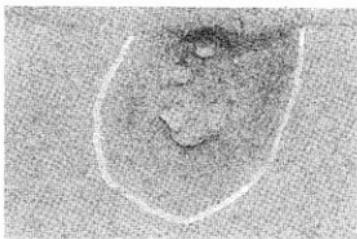
6次調査 2区完掘状況



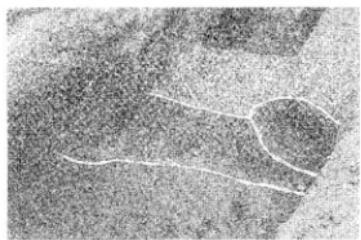
SK40



5次調査
西側完掘状況



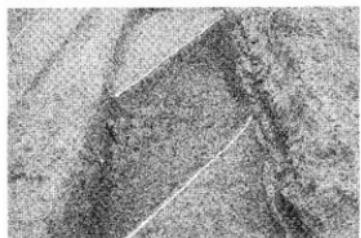
SK41



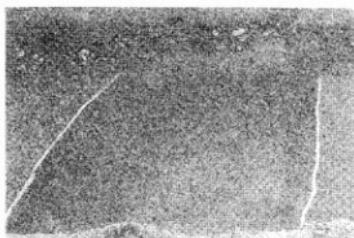
SD25・SK48



SD21



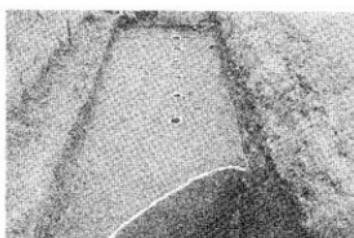
SD22



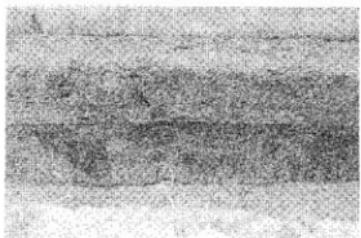
SD18-1



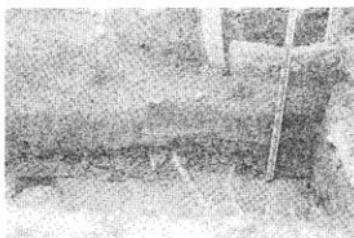
SD26~29



SA01



SK46・47断面



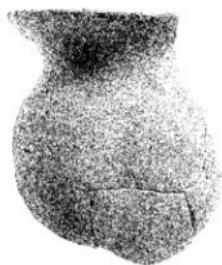
SX05断面



21-1



8-3



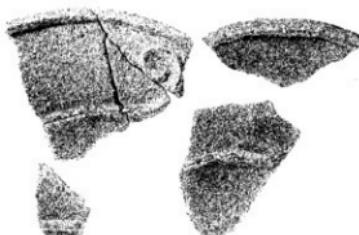
8-2



6-1



8-1 (表)



8-1 (裏)

報告書抄録

ふりがな	みやにし・いっかくいせき						
書名	宮西・一角遺跡						
副書名	市道林町47号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	第2冊						
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第55集						
編集者名	川畑 聰・中西 克也						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 Tel 087(839)2636						
発行年月日	平成13年9月30日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
宮西・一角遺跡	高松市 林町	37201		34° 17' 28"	134° 4' 5"	H12.2.17 ~ H12.5.10 ~ 5.16	63 m ² 170 m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
宮西・一角遺跡	集落	弥生時代 室町時代 江戸時代	溝・土坑 溝・柱穴 溝・柱列	弥生土器 土師器 土師質土器 七輪	弥生前期集落 中世屋敷地を囲う溝		

市道林町47号線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第2冊

宮西・一角遺跡

2001年9月30日

編集・発行 高松市教育委員会
印 刷 サンプリント㈱